● 小規模校教育 ●

小規模小学校の社会に開かれた教育課程の創造
～加太を中心とした地域との連携・協働の活動に焦点を当てて～

和歌山県　**和歌山市立加太小学校**（校長 岩本浩志）

①教科横断のカリキュラムデザインで習得・活用を意識

②多様な他者・地域との連携・協働で豊かな学びを実現

③安心・成長・自立のスタートカリキュラム

１．事例校について

事例校（以下、本校）は、和歌山市の西の端、淡路島の対岸にあり、校区には海や山が広がり、自然環境が豊かな地域に位置する。

全校児童数は、2021（令和３）年度 53 人で、学級数は、複式１学級を含む全７学級である。児童数は 1991（平成３）年度 293 人、2001（平成 13）年度 199 人、2011（平成 23）年度 124 人と減少傾向にある。

稚魚の放流をする児童の様子

学校内外において地域社会とのつながりがあり、児童は、伝統文化である獅子舞を地域の方から教わったり、栽培漁業の一環で行われている稚魚の放流を行ったりしている。

２．はじめに

本校は長年にわたり、本校の位置する加太地域とともに、地域と一体となった教育活動を進めてきている。児童が地域に親しみ、地域を知り、地域に学ぶことを大切にした実践に取り組んでいる。特に、加太の海をはじめとした自然や神事等の地域素材に焦点を当て、それら地域素材を学習材と

して活用した単元構成を図り、体験活動を充実させながら取組を進めてきている。

地域の方々が学校に協力的に関わってくれるおかげで児童はさまざまな体験活動が行える一方で、近年、次の点が本校の課題としてあげられる。それは、さまざまな体験活動がそれぞれ独立しているため、児童の意欲が高まらないこと、体験活動が単発で終わってしまい、教育課程のどこに位置付けたらよいのか戸惑うことである。

また、近年は児童数の減少により、各学級が単級または複式学級となっていることで、児童の人間関係が固定化し、学習活動において多様な考えにふれたり、多様な他者と協働したりする経験が不足している点も課題として挙がっている。

そこで、本校には２つのことが求められていると考える。１つ目は、今まで本校が行ってきた教育活動を生かしつつ本校の課題を解決するために、地域の行事等と各教科・領域を有機的に結び付けるカリキュラムデザインの充実が求められていることである。２つ目は､児童が多様な他者と連携･協働することができる単元を開発することである。

３．研究について

3.1　研究主題

小規模小学校の社会に開かれた教育課程の創造

～加太を中心とした地域との連携・協働の活動に焦点を当てて～

3.2　主題設定の理由

本校児童が成人する頃の社会はどのような社会なのか。人口減少、グローバル化のさらなる進展、目を見張る技術革新等、社会環境はより大きく変化を遂げ、児童らが将来つく職業も大きく様変わりするだろう。大きく変化した社会において直面する教育課題は複雑多様、未知なものであり、「何が正しい学校教育か」私たち教員も、解を求め難いと言えるだろう。

このような社会の変化を踏まえ、社会に開かれた教育課程の理念のもと、令和２年度より現行学習指導要領が全面実施されている。社会に開かれた教育課程では、次の３点が示されている。１）社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと　２）これからの社会を創りだしていく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと　３)教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有しながら実現させること　の３点である。この点について、熊谷ら（2021）は ,「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、学校教育においても「地域学校協働活動」を展開することの必要性を述べている。また、和歌山市が令和４年度から｢小規模特認校制度｣の活用を発表し、その対象校に本校が指定されていることから、本校にも特色ある学校づくりが求められているところである。文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」には、小規模校を存続させるには、小規模校のデメリットを緩和し、メリットを最大化する方策をとる必要性も指摘されている。

これらのことに本校の児童の実態を加味すると、小規模小学校である本校が、積極的にそのデメリットを小さくし、メリットを大きくする取組を行い、本校児童に必要な資質・能力を育むことのできる教育課程を構築、改善していくことが必要であると考える。このようなことから、研究主題を「小規模小学校の社会に開かれた教育課程の創造」とし、副題を「加太を中心とした地域との連携･協働の活動に焦点を当てて」に設定し、実践的研究を行った。

3.3　研究内容と重点について

(1) 各学年の教科横断的年間指導計画（以下、「加太ストーリー」）の実践的検討

※「地域行事等と各教科・領域とを有機的に結び付ける実践を考えること」を重点項目の１つ目とする。

(2) 幼小接続カリキュラム（スタートカリキュラム）の実践的検討

※「年長（５歳）児さんの実態を知り、幼稚園の先生と交流活動の方向を探ること」を重点項目の２つ目とする。

(3) 校外の多様な他者と連携・協働することのできる単元開発

※「多様な他者と連携･協働する活動が、児童にとってどのような意義・意味があるのかを考察すること」を重点項目の３つ目とする。

3.4　研究経過（概要）

１学期

○カリキュラムデザイン研修

○本校児童に求められる力の分析

（各自「加太ストーリー」の構想・実践）

２学期

○「加太ストーリー」交流会

（各自「加太ストーリー」の見直し・実践）

○校内授業研究会

○スタートカリキュラム・アプローチカリキュラム 幼・小合同研修

○「非認知能力」幼・小合同研修

○「小規模特認校」研修

３学期

○大阪府の小規模特認校視察

○今年度校内研究の省察と次年度の展望

４．研究の実際

4.1　各教科・領域間での関連

図１は、今年度作成した「加太ストーリー」である（６年 抜粋)。ここでは、各教科・領域間がどのように関連するのかを矢印で図示した。また、各学年の活動テーマとねらいも示した（表１)。図示することで、指導者はどの教科・領域で習得し、それをどの教科・領域で活用、または深化させるのか見通しをもって指導に臨むことができる。

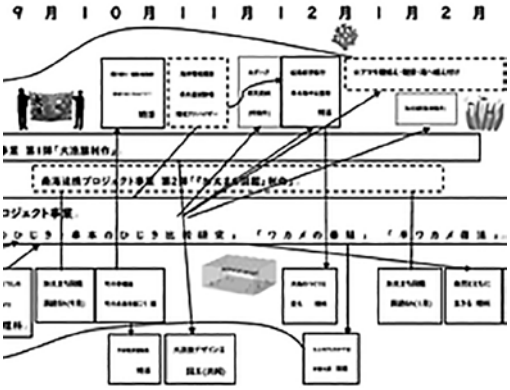

図１

表１

第１学年	
テーマ	みんなと一緒にぐんぐん伸びよう ～異年齢交流から連携へ～
ねらい	・お互いに育ち合うような交流の積み重ねにより、交流がイベント的なものではなく、子どもの発達にとって必要な学習の場であるとともに互いの学び合いの場となるようにする。 ・事前・事後の学習を通して、園児との交流体験への思いや願いを膨らませたり、自分自身の成長を感じたりすることができるようにする。
第２学年	
テーマ	加太のいいとこ カタチにしよう ～加太をいっぱい 吸い込んで～
ねらい	・加太の素材を「吸い込み」表現して伝える。 ・学校にいる人や身近な幼稚園の子、地域の人たちへとかかわりをひろげる中で、加太の魅力を知り、生活につなげる。
第３・４学年	
テーマ	加太発テングサの旅 ～ボードゲーム作りを通して～
ねらい	・加太のテングサがどこでどのように活用されているのか追求することを通して、加太のテングサのすごさやすばらしさに気づくとともに、誇りをもつ。 ・探究的な活動を通して多くの人々と関わりをもち、課題を見つける力、情報を整理・分析する力、自分の考えを表現する力を養う。
第５学年	
テーマ	『海藻』を通した食文化の学びから、加太の海を守る学びへ
ねらい	・体験を通して加太の食文化を学ぶ。 ・海藻を切り口に加太の食文化背景となる自然環境とかかわり、それを未来に継承していく心情をもつ。
第６学年	
テーマ	加太と SDGs
ねらい	・学校内外の人的・物的資源をフルに活用し、子どもが多様な他者とつながり豊かに学ぶ。

4.2　各教科・領域を関連させた取組

<u>第２学年の実践例</u>

特別活動、生活科、図画工作科、国語科（書写）

２年生は、生活科の学習で加太の町を中心として学習を行った。一度目の町探検では、加太のさまざまな場所を探検し、訪れた先々で施設の内部を見学させてもらったり、質問させてもらったりした（写真１）。学習を通して、児童は加太のひとやものにじっくりと関わりながら学習を進めた。

２学期は、地域で開催された行事である「カダハク（紀の国わかやま文化祭 2021）」へ展示で参加した。参加に際しては、主催者から依頼があり、指導者は、「紀の国わかやま文化祭 2021」のパンフレットを配るとき、児童がカダハクに参加したくなるように言葉かけを行い、児童の意欲が高まるように工夫した。

図画工作科で展示作品（写真２）を創る際は、生活科の町探検で学習したことを想

写真１　町探検

写真２　カダハクでの展示作品

起させてから、制作に取り組むように展開した。また、書写での学習を生かし、展示作品にどのような文字で書くかについても、児童とともに考えた。

第３・４学年（複式学級）の実践例

総合的な学習の時間、国語科

３・４年生の総合的な学習の時間は、加太の特産物であるテングサに注目し、探究的に学習を進めた。

学習では、赤いテングサを白くなるまで繰り返し干す体験からスタートした。次に、テングサを採っている漁師さんや漁協の販売部の方にインタビューを行った。また、加太のテングサを使って料理を出しているお店へもインタビューを行った（写真３）。そして、テングサから寒天を作り、それを味わう活動も行った。

３学期、総合的な学習の時間のまとめとして、国語科「お願いやお礼の手紙を書こう」へと展開し、この１年間で関わってきた人にお礼の手紙を書く活動を行った。

写真３　オンラインでインタビュー

第５学年の実践例

総合的な学習の時間、社会科

５年生の総合的な学習の時間は、海を軸に１年間探究的な学習に取り組んだ。１学期は、体験活動として地域にある種苗生産を行う栽培漁業センターで稚魚の放流体験（写真４）、夏休みは磯遊びや漁船に乗せてもらう体験を行った。

写真４　稚魚の放流体験

２年生同様、カダハク主催者からカダハクでの舞台発表（海草フェス）への依頼があり、指導者は、２学期に入るとそのことを児童に伝えた。これまで児童に海での体験を十分に経験させてきたことで、カダハクに向けて意欲的に活動をスタート切ることができた。

カダハクに向け海藻について調べていた児童は、「調べた海藻が加太に本当に生えているのか」が気になり、海藻を採っている漁師さんへの聞き取り調査を行った。漁師さんとやり取りするなかで、話の焦点は「加太の海の豊かさ」へと移っていき、漁師さんから「海と山はつながっている」と教えてもらうこととなった。この「山と川と海」を劇で学習発表をすることになった児童は、さらに意欲的に活動を進め、海草フェスに集まった約 50 人を前に学習発表を行った。

【児童の感想】
・自然は、人によって壊すことも作ることもできる、ということがわかった。
・山をきれいにしないと海が汚くなり、海藻や魚が生えてはいけないことがわかった。

２学期末は､ここまでの学習を社会科｢森林とわたしたちのくらし」へと展開し、さらに学習を深めることができた。

4.3　接続カリキュラム作成の取組

幼小接続カリキュラム作成に向けては、他県で保小接続に取り組み、既に成果を挙げている園の方から話を伺い取組を進めた。

話では、各時期に行う交流活動は、事前に打ち合わせておくポイント、事後に話し合うポイント等があり、それらを教えてもらった。どの活動も、活動する園児・児童が互いにその年齢にあった目標を達成できるように計画することが重要だということがわかった。また、話を伺った園で作成した接続カリキュラム（表）を見せていただいた。給食の配膳や図書の本の選択等を事例に、どこでどのようなつまずきがあったのか、その原因は何だったのか、それをどのように改善したのか具体的に教えていただいた。これらの話をもとに、幼稚園の先生と何度も打合せしながら（写真５)、交流活動と接続カリキュラムの検討を重ねた。

検討を重ねた結果、スタートカリキュラムの基本的な考え方として次のようなことを確認した。それは､｢スタートカリキュラムのねらいである、遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、自己を発揮していくには、この期間だけでなく、１年を通して、幼稚園児や異学年と関わっていくことが大切なのではないか」ということである。そこで、１年を３期に分け、各期でねらいをもって（表２）交流活動を積み重ねることとした。

写真５　幼稚園の先生と打合せ

表２

５歳児 １月～３月（13 期）
１年生 ４～７月（14 期） 入学当初、子どもたちは環境が変わり、年長時にスムーズにできていたことでさえも難しくなってしまう場合もあるため、学校での環境や習慣を知り、安心して過ごせることを第一に活動を行っていく期間とする。 ９月～ 12 月（15 期） 学校生活に慣れ、異学年から影響を受けつつ、自ら行動し、成長していく期間とする。 １月～３月（16 期） １年間の学びを振り返り、自立に向けて歩む期間とする。

4.4　交流活動の実践例

成長していく期間（８月末～ 12 月）

10 月のスポーツ祭で年長児、１・２年生合同の種目を設定した。みんなが楽しめるような障害物リレーにするために、どの

ような道具を置いてどのように走ったらよいのか、２年生が中心となってみんなで考えた（写真６）。コーンの周りを回ったり、ミニハードルを跳び越えたりするアイデアを主に２年生が考えだし、１年生や幼稚園児がその動きをできるのか一緒になって試していた。

またスポーツ祭の準備運動では、幼稚園児が知っている体操を園児･児童で踊った。１・２年生は、幼稚園児の友達から体操を教えてもらい、それに１・２年生がアレンジを加えた体操を３年生以上の児童と先生に伝えた。そのアレンジのアイデアも２年生が中心となって考えていた。スポーツ祭では２年生とも交流活動を行ったことで、１年生はたくさんのアイデアを出す２年生に憧れをもった。

写真６　スポーツ祭の障害物リレー

スポーツ祭の他にも、生活科「見つけたあきであそんでみよう」では、幼稚園の友達を招待して自分たちが作った秋のおもちゃで一緒に遊んだ。ここでも１年生が作り始めようとするタイミングで、２年生が生活科で行っているおもちゃランドに招待してもらう機会を取り入れた。招待してもらった１年生は、２年生の工夫を凝らしたおもちゃで遊ばせてもらい、「自分たちもこんな場にしたい」と思いを膨らますことができた。その後、どうやって幼稚園児と遊ぼうか悩んでいたときには、２年生に１年生の秋のおもちゃを見てもらいアドバイスをもらった。２年生からアドバイスをもらった１年生は、おもちゃに修正を加え、秋のおもちゃランドとして、幼稚園児と遊ぶことができた（写真７）。

写真７　秋のおもちゃランド

自立に向けて歩む期間（１月～３月）

１月に学習した国語科「おはなしをかこう」では、昔話を基に児童がおはなしを作った。作ったおはなしは、「幼稚園の先生に見せたい」と思い、幼稚園の先生に見せに行った。１年生のおはなしを読んだ幼稚園の先生は、おはなしを園児に読み聞かせしてくれた。自分たちのおはなしを幼稚園の友達に読み聞かせしてもらったことで、１年生は喜びを感じている様子だった。

4.5　多様な他者との連携・協働

第６学年の実践例

６年生は、「加太と SDGs」をテーマに設定し、「多様な他者との連携」を意識して活動した。１学期、市役所企画課の職員の方から SDGs について学び、市内の学校の３学級が企画課とそれぞれ「SDGs

推進に関する約束」を結び、ゆるやかなネットワークを築いて活動を始めた。こうした中で、ターゲット 11・17 を意識して SDGs 推進に関する「南海連携プロジェクト」を行った。

南海連携プロジェクトでは、校区にある南海電鉄加太駅（以下、加太駅）にご協力いただき、加太駅に掲示する大漁旗をデザインし、南海電鉄のイベントでそれを贈呈した。

活動では、１学期加太駅を訪れ、南海加太線が抱える問題について調査した。調査した結果、コロナ感染症拡大以降、南海加太線を利用する観光客が減っている問題があることがわかった。観光客の減少は、交流人口の減少を意味している。そこで、先に述べた大漁旗をデザインし、加太駅を盛り上げ、その結果として交流人口を増やすことにつながる取組をしようと動き始めた。活動を進めるにあたっては、地域のデザイナーの方に協力していただき、デザインする際の流れ、打合せでは何を尋ねるのか等、助言してもらったり相談にのってもらったりした（写真８）。デザイン案を決定するまでには加太駅で利用客にアンケート調査をしたり、加太駅の方と打合せを重ねたりしながら進めた。

写真８　デザイナーさんに相談

南海連携プロジェクト以外にも市内の３学級での活動として、「今年度ゆるやかなネットワークを構築し、各学級が取り組んでいること」を１つの動画にまとめた。動画の作成にあたっては、オンライン会議システムを使い、市内の３学級で企画会議をもち（写真９）、会議内で動画用撮影も行った。作成した動画は、和歌山県教育委員会主催の「ふるさとわかやま学習大賞」の動画部門に応募した。

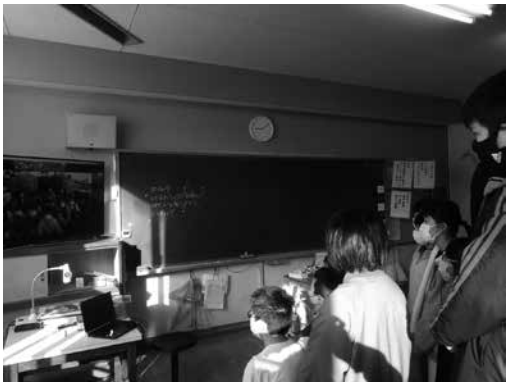

写真９　３校でオンライン会議

多様な他者との連携の考察

大人との関わりの成果として、(1) 児童が活動を進めていく上で必要なアドバイスや支援をもらえること、(2) 児童が困難を感じている活動に対して児童の活動意欲を底支えしてくれたり、町といった学習対象に対して情意面での「距離」を近づけたりしていることが挙げられる（女児の作文）。

12/24（金）女児「２学期のふり返り」
私は、海プロジェクトと南海連けいプロジェクトをして、気持ちの変化がありました。(中略)
私が今までしてきた活動で記おくに残っている活動は、南海連けいプロジェクトです。なぜなら、私が一番関

わった活動だったからです。アンケートから話し合い、色ぬり、ぞうてい式まで全部私も協力してきたことです。ぞうてき式では、たくさんの人が私たちのつくった大漁旗を見てくれてうれしかったです。また、大変だった活動も南海連けいプロジェクトです。１学期から長い時間で行ってきた活動だからです。本当に話し合いの１つ１つもじっくり考えました。大変だったけど、とても意味のある活動だったと思いました。

最後にいろいろな活動をしてきて大切だと思ったことは、協力することと、いろんな人の気持ちです。どの活動もたくさんの人が関わってくれました。その人たちの協力が無いと、今までの活動が成功しなかったかもしれないです。また、活動に関わってくれた人や私たちが「加太を盛り上げよう」と思っていなかったり、「加太のみ力をいろんな人に知ってほしい」と思わなかったら、いろんな活動が無かったかもしれないです。なので、加太に対しての熱い想いが大切だと思いました。これからも、いろんな活動があると思いますが、上のことを大切にしてがんばっていけたらいいなと思いました。

２学期途中、学校が一時臨時休業になったり対外的な行事が入ってきたりした関係で、２つのチームに分かれて同時に活動を進めなければならなくなった。児童の記憶や印象に残っている活動は、所属したチームでの活動が挙げられていた。この活動に対して児童らは「手ごたえ」を感じているようである。それは、ある程度の期間をかけて取り組み、その結果に対して「外」からの評価が得られたことがそのような「手ごたえ」へとつながっていると考える。

５．研究のまとめ

研究を通じて以下の５点が確認できたと考える。

(1)「加太ストーリー」を作成することで、指導者が各教科・領域間を教科横断的につなぐ意識をもつことができている。今年度はカダハクへの参加・協力の依頼があった。この行事への参加・協力に際しても、各指導者は生活科、総合的な学習の時間をはじめ、国語科や図画工作科等、児童の学習経験を生かしたり、参加・協力することで各教科・領域のねらいを達成できたりするように、学習をデザインすることができた。

(2) 地域の行事へ参加・協力することを児童に伝えるときは、児童が活動に対して主体的に取り組めるよう手立てを打ち、児童の主体的に学習に臨む姿を引き出すことができていた。

(3) 詳細は記述していないが、上記「3.4 研究経過」で示した通り、有識者から全国の小規模特認校の取組についてお話いただいた。この研修を通して、小規模特認校の特色ある教育活動を知ることができたとともに、大阪府の小規模特認校の学校視察を行い、次年度からの本校の教育課程を考えるきっかけとなった。

(4) 主に幼稚園の先生、小１、小２の担任間で幼小接続カリキュラムについて検討を重ねた結果、「アプローチ・ス

タートカリキュラム」の表を作成することができた。また、作成に向けて、打合せを何度もしながら交流活動を行うことで、小学校は、園児との交流が学習材となるように、また同時に、幼稚園は、交流児童が「環境」となるよう、それぞれの指導者が交流活動を考えるための視点をもつことができている。そして、今まで以上に互いの職員室を行き来し、会話する姿が頻繁に見られるようになっている。

(5) 多様な他者と連携･協働する活動では、関わってもらった人の専門性を実際に体感することができた。また、その人の仕事に興味をもったり、その人が行っている仕事について共感的に理解したりすることもできた。そして、自分たちだけでは難しいようなことでも、他者と協働することでやり遂げることができることも体感することができた。

６．おわりに

小規模校は地域社会とのつながりを最も強く感じられる学校である。このような学校で児童が豊かに学べる学校環境を提供できるよう私たちは今後も研修に努めたい。

（文責：中山義之）